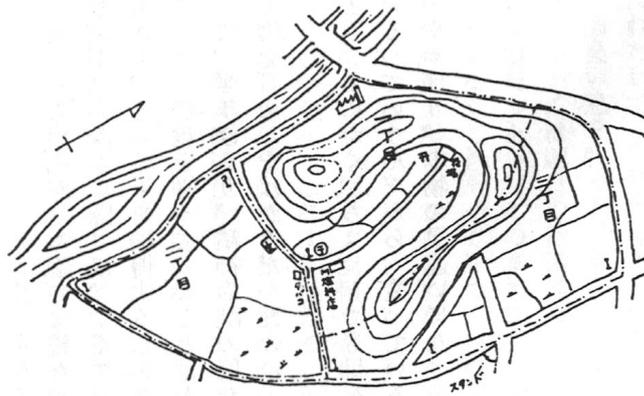


「ノコギリヤネ 100 年マップ」と「燃えつきた地図」

(断章“ノコギリヤネのある風景 ”その 8)



▲『燃えつきた地図』の挿絵

「ノコギリヤネ文庫フェア」(2021.5.23～7.25)の折り返し点となる6月27日、「ノコギリヤネのある風景から見えてきたこと」と題して、シンポジウムを開催した。シンポジウムと銘打ちながら、実態は、フェアを通して何かしらの関心を持った方々にご参加いただいた「意見交換の場」と呼ぶのが相応しいかもしれない。個人的には、手記「ノコギリヤネのある風景」の今後の展開につながるものが見えればという目論見もあった。

参加者の一人から、「地図」が提示された。いや、正しくは一冊の「本」である。それは、安部公房の『燃えつきた地図』であった。彼(仮にM氏としておこう)は、シンポジウムの前日、のこぎり二を訪れて、シンポジウムの存在を知ったという。事前に「ノコギリヤネのある風景」のすべてに目を通されて参加されたというから嬉しい限りである。

M氏から「安部公房」、「燃えつきた地図」のワードが発せられた時、私は酷く狼狽した。実は、シンポジウム開催の前に、『燃えつきた地図』を読まねばと思っていたのである。その驚きから、不覚にもM氏が『燃えつきた地図』を引き合いに何を語られたのか、ほとんど記憶に残っていない。そして、なぜか、メモも残していなかった。

その日以来、私の頭の片隅、いや多くの部分を「燃えつきた地図」が占拠していた。どうやら、「燃えつきた地図」という視点から、「ノコギリヤネ 100 年マップ」を再考しなければいけないようだ。

「シンポジウム」はまだ終わっていなかった。

ノコギリヤネ (神奈川県藤沢市在住/のこぎり二にノコギリヤネ・コウバを開設)

1. 「ノコギリヤネ 100 年マップ」 から失踪した時代

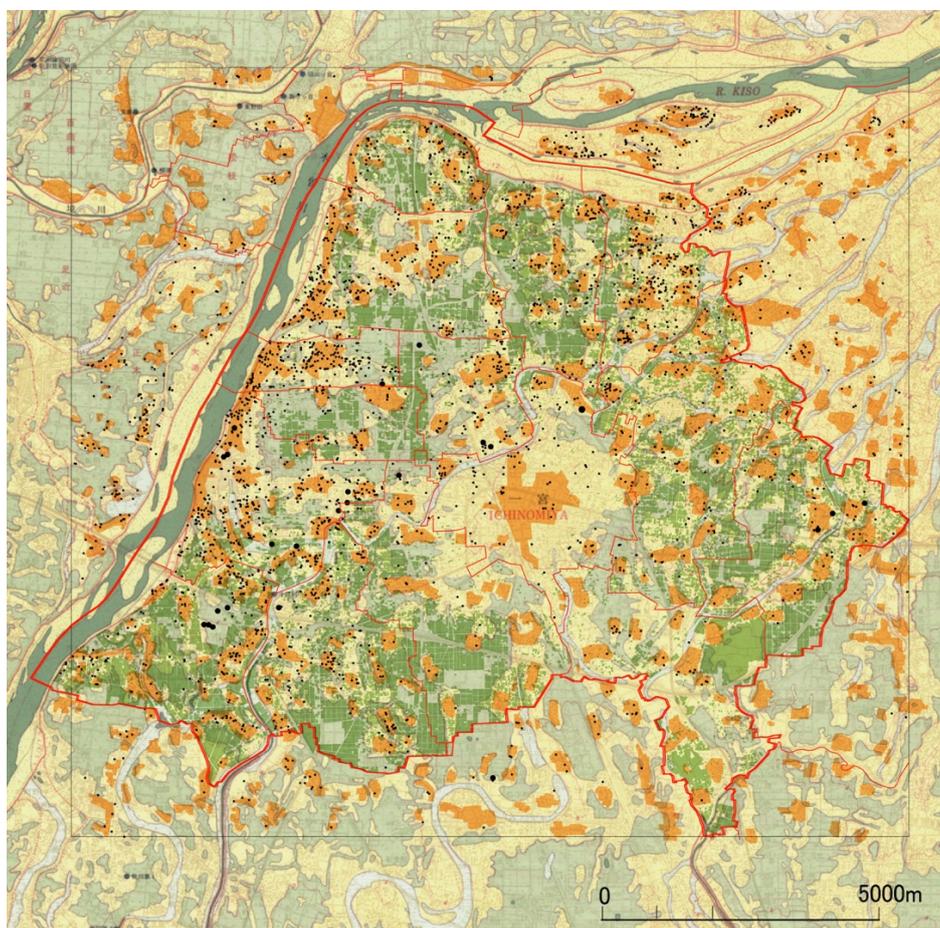
(以下、MはM氏、Nはノコギリアン)

N：安部公房の『燃えつきた地図』は、1967年に刊行された長編小説です。時代は高度成長期の真只中、都市という迷路を背景に、突然失踪した人物を捜索する探偵が、捜査の過程でいろいろな事件に遭遇して、記憶を失い、自身が失踪するというストーリー。地図が意味するものは、捜査のための手がかりであり、生きるための目的を示すものとも読めます。

実は、安部公房の作品には、意識的に距離を置いてきました。安部公房にはとても関心があったのですが、私自身の仕事である「都市計画」の否定につながるのじゃないかと懸念していたように思います。今回、興味深く読むことができました。この作品のテーマになぞらえれば、私自身もふるさとの一宮から東京に出て行った失踪者です。

M：失踪者という意味ではぼくも同じです。横浜の大学で建築を学び、仕事に就きましたが、いま、こちらに戻って来ているので、二重の失踪者かもしれません。安部公房とこの本は、都市計画系のゼミで出会いました。木曾川に近い田園風景の中で育ったぼくには、横浜、多摩などのニュータウンはまさに『燃えつきた地図』で描写される殺伐とした団地の風景と重なりました。

N：実は、「ノコギリヤネ 100 年マップ」には、『燃えつきた地図』の時代である1970年時点の地図が重ねられていません。50年前の時代が欠落しています。そう、“失踪”している。



▲ ノコギリヤネ 100 年マップ

2. オワリ、イチノミヤという共同体と神話

N：私が育った一宮の1960～1980年代は、共同体意識の感じられる時代。とにかく「都市」に関心があり、東京に出たかった。しかし、いま「ふるさと」を意識するようになっていきます。

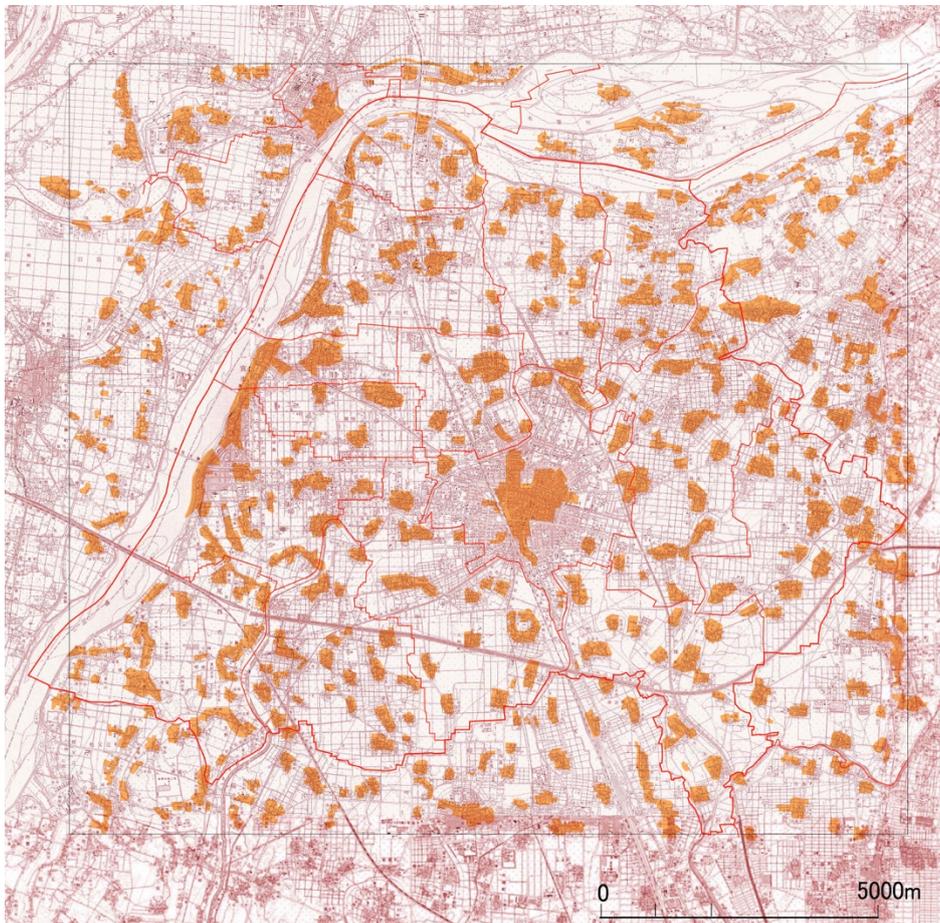
「ノコギリヤネ100年マップ」は、100年前の集落ちという「農村共同体」をベースにして、そこに、オワリ、イチノミヤという神話を重ねています。神話は共同体の形成に不可欠です。

M：ノコギリヤネさんの世代は、団塊世代の後の「しらけ世代」というか大人しい世代ですね。戦争が終わって30年、大学紛争もほぼ終結している。主張に乏しいというか・・・

N：そう、「おたく世代」の始まりかな。一回り上の団塊世代と違って自己主張があまり好きじゃない人が多いのではないかな。もちろん、世代でひとくくりにはできないけれどね。

安部公房は、すべての共同体を拒絶し、ふるさとのような「抛りどころ」も否定しています。農村から都市に逃れた人間は、その中にまた「擬似共同体」をつくって逃げ込むという。都市の中に「ムラ」を作っちゃう。自立していないということでしょう。

私は、安倍の考えるような本当の意味での都市人にはなれなかった。本能的に安部公房を避けてきたのはそのせいかもしれません。だからといって、安易に昔の共同体を美化するつもりはありません。これからの時代の共同のカタチがあるはず。それは、大きな共同性ではなく、小さな共同性かも。そう、個別のノコギリヤネで生まれる物語のような。



▲ 1920年集落地と1970年市街地の重合せ

3. 1970年の燃えつきた地図：ノコギリヤネの失踪

M：私の生まれた80年代、子供の頃、ノコギリヤネの音がまちに響いていました。祖父母の家にもありました。既に閉じていましたが。それもいつしか消え、気づかないうちに、周りからも、ノコギリヤネは多くが無くなっていました。ノコギリヤネの失踪ですね。

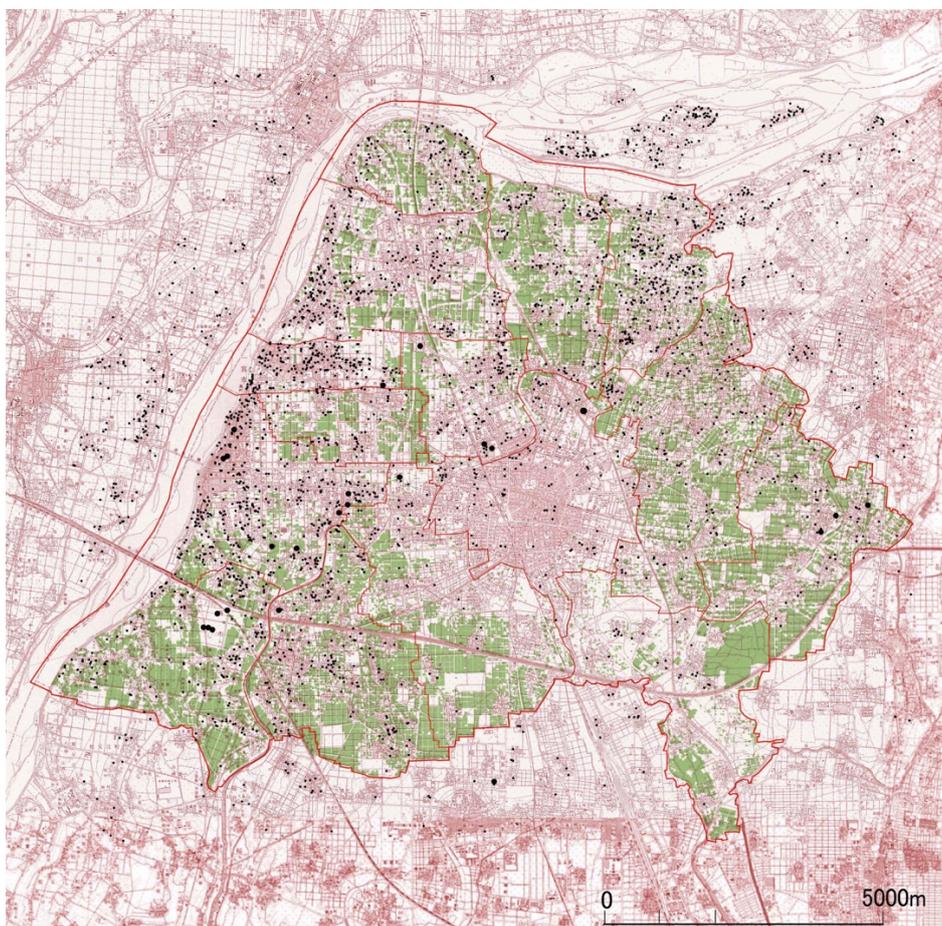
N：奇しくも、1970年に一宮市（尾西市、木曾川町含む）の繊維工場数は、ピークの8,000を数えています。ほぼ全てがノコギリヤネと考えてもいいでしょうね。それが、いま2,000です。

ノコギリヤネの失踪は、同時にそこで働く人たちの失踪でもあった。特に外から働きに来ていた女工さんたち（彼女たちもふるさとの失踪者でもある）。60年代以降、農村社会の崩壊、核家族化が進行するけれど、一方で、彼女たちを含めたノコギリヤネの“拡家族(拡大家族)”という共同体がこの地域を支えていたのかもしれない。

そして、農地を潰しながら、市街地は都市計画を超えて無秩序にスプロール化していく。

『燃えつきた地図』について、安部自身がこう記しています。「おのれの地図を焼き捨てて、他人の砂漠に歩き出す以外には、もはやどんな出発も成り立ち得ない、都市の時代なのだから…」

M：社会システムの安定した農村共同体の時代と違って、変貌の激しい都市の時代には、地図は未来の目的地を示すことができなくなったのでしょうか。だとすれば、1970年の地図は燃えつきていたのかもしれないですね。ノコギリヤネの絶頂期でありながら。



▲ 1970年市街地と農地（現在）の重合せ

4. 地と図の反転で見えてくる未来

M：安部公房は、都市の中で絶え間なく再生産される廃棄物やゴミにシンパシィを感じると言っています。捨てられ、忘れられた存在という意味では、ノコギリヤネに通じるものがあるように思います。もちろん、現役のノコギリヤネもありますが、廃棄される方向にあるでしょう。

N：ノコギリヤネへのシンパシィか。いまは廃棄物扱いされているが、逆に注目されるようになるはず。これからの社会が、サステイナブルとかダイバーシティとかを単なる流行りとしてではなく本当に考えていくとすればだけど。ブリコラージュも同じだ。自然生態系の中で未来を考えていくならば、農業は極めて重要な意味を持つてくるのは明らかなこと。農地というオープンスペースの存在に注目していきたいと思う。

地と図で構成される地図。それは、ポジとネガの関係。反転させるとどうなるかな？
廃棄物、ゴミ、空き家・空き地というお荷物から、未来が見えてくるかもしれない。

M：じゃあ、100年マップも反転させてみるかい。

ほお・・・、まさに「燃えつきた地図」だな。ノコギリヤネがくっきりと浮かんできたじゃないか。真っ黒なオレの世界に。失踪者発見！ カア、カア、カァー。

N：えっ、M・・・。おまえ・・・マスミダカラスなのか？



▲ ネガに反転させた「ノコギリヤネ 100年マップ」

○エピローグ：そして、はじめに戻る。しかし、それは同じところではない。

シンポジウムに参加されたMさんの名誉のためにことわっておくが、これは全く架空の対話である。しかし、Mさんはマスミダカラスに遣わされた「マレビト」だったかもしれない。

おかげで『燃えつきた地図』ははじめ関連する多くの批評、評論を読むことができ、「ノコギリヤネ100年マップ」を思考する視点を得ることができた。そして、安部公房を介して、若き日に抱いた「都市」への想いがよみがえってきたのである。

『燃えつきた地図』の最後のくだりで、自分を見失い、他人に見つけてもらうことを願っていた探偵の「ぼく」は、こう決意する。「探し出されたところで、なんの解決にもなりはしないのだ。今ぼくに必要なのは、自分で選んだ世界。自分の意志で選んだ、自分の世界でなければならないのだ」と。シンポジウムに臨んだMさんの心境と重なるような気がしてならない。

いつか、Mさんと本当の対話ができる日が来ることを楽しみにしている。

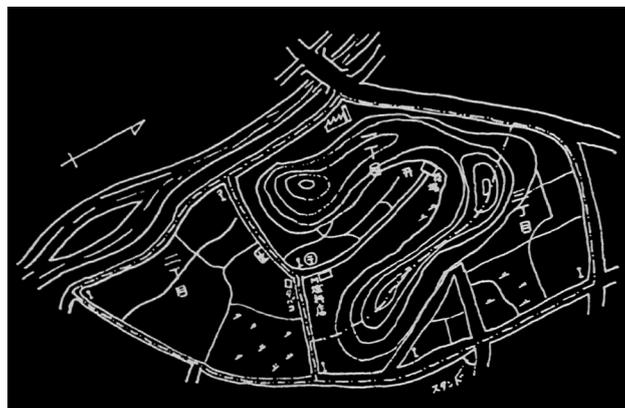
安部公房の作品の面白さの一つは、終わりが始まりに戻るところにある。この作品もそうである。冒頭で描かれる失踪者の住んでいた団地に向かう坂道の描写が終盤でも繰り返される。しかし、この道の先には自分の家があると思込んでいる。失踪者と自分の記憶が混同している。自分が失踪者となっている。

はじめに戻るが、それは同じところではない。「ノコギリヤネ100年マップ」は、廃棄物化される趨勢にあるノコギリヤネの分布図かもしれない。しかし、反転することで未来が見えてきたように思う。

今回、失踪前のノコギリヤネ分布図の作成を試みた。8,000のノコギリヤネ分布図である。個々の位置はわからないが、地区単位で分布のイメージは表現できるだろう。しかし、図の縮尺が小さいため、市街地が真っ黒になってしまう。これはマスミダカラスの罠か。少し表現の工夫が必要である。あらためてチャレンジしたいと思う。

その前に、やっておきたいことがある。ノコギリヤネからの失踪者であるオニの搜索である（「ノコギリヤネのある風景・その4」）。オニというのは、共同体がその存続のために考え出した異質な存在に他ならない。しばらく途絶えていたオニ探しを始めようと思う。

2021.8.16（一日遅れの終戦記念日）



▲ネガに反転させた「『燃えつきた地図』の挿絵」